
GS ~ ガンダムシステム

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GS（ガンダムシステム

【Nコード】

N3435Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

これはもし束さんが開発したのがISじゃなくてガンダムだったら…。というお話です。登場する機体はガンダムだけです。11/10ゼロさんのアイデアにより、訓練機はふつうのMSにします。後々登場させますので期待してください。

EPISODE 1 (前書き)

カオス物が好きな主が作った作品です。ゆるくりとどうぞ。

EPISODE 1

少年織斑一夏は困惑していた。その理由は…。

(覚悟していたがきついな…。俺以外みんなクラスメイトが女子なのは…。)

ジーエス
GS。正式名称ガンダムシステムは本来女性のみ扱える兵器だった。しかし

し、彼は男性で唯一GSを起動させたため、国立GS学園に強制入学させられた。

そう。彼が今いる場所こそが国立GS学園だ。今教卓の前で

副担任の山田先生があれこれ説明をしている。他の生徒はそんなのお構いなし、

とばかりに俺に視線を注いでいる。

ふと視線を左にやるとそこには幼なじみの篠ノ之箒がいた。俺の視線に気づくとふいつ

とそらされてしまった。

(箒…助けてくれよ…。)

そんな事を考えていると教室の扉が開いて一人の女性が入ってきた。ん？この威圧感、

つり上がった目、もしかして…。

「関羽!？」

べしっ!!!

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者。」

おもいつきり出席簿で叩かれた。ちきしょう、痛てえ…。こんな力、まるで千冬姉…、

あれ？千冬姉の声にどことなく…。

「織斑先生、会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてしまつてすまないな。ごほん!!!

諸君！私が担任の織斑千冬だ！諸君らを一年で使い物にするのが私の役目だ。

教師の言ったことは覚えろ!!覚えられなくても覚えろ!!!

絵に描いたような鬼軍曹。これが俺の姉の織斑千冬だ。第1回G
Sモンド・クロッゾ大

会で無傷での優勝を成し遂げた最強の称号「ブリュンヒルデ」を持

つ姉。弟としては微妙

な立場だ。

自己紹介も無事終わり、
(頭部負傷者一名)二時間目までの休憩
時間となった。

「ちょっといいか？」

その声の方を向くと…、

「篝…。」

幼なじみが立っていた。

EPISODE 1 (後書き)

どうでしたか？戦闘はもう少し先です。

DATE FILE (前書き)

この作品に関する設定です。知りたい事がありましたら気軽に質問してください。

DATE FILE

DATE FILE データファイル

1 . G S ジーエス

正式名称ガンダムシステム。操縦者に合わせてサイズは変化する。装着時は見たまま

該当するガンダム。篠ノ之束博士が開発した。女性のみ扱える設計となっている。

2 . 登場人物

おりむら いちか 織斑一夏

世界で唯一GSを動かせる男性。試験会場にあつた訓練GS「RX-78-1」を起動させてしまい、国立GS学園に入学することになる。自覚無しに女性をときめかせている。極度の唐変木だが徐々に…。

専用GSは「エクシア」。

しののへ 篠ノ之箒

一夏のファースト幼なじみ。小学校の頃、自宅の剣道場に通っていた一夏と稽古を共にしていた。心底一夏に惚れている。姉がGSを開発したため、小学4年の時に一夏と別れる。

専用GSは無し。

おりむら ちかゆ 織斑千冬

一夏の姉にして担任の教師。第01回世界GSモンド・クロッソ大会を無傷で優勝した

過去を持つ。冷たい態度を一夏にとっているが心の底では一夏を気にかけている。

現役時代のGSは「オー」。

セシリア・オルコット

イギリス代表候補生。学園入試を主席で通過。自画自賛の傾向があり、あまり好まれる性格ではない。

専用GS「ケルディム」。

ファンリンイン
鳳鈴音

中国代表候補生。一夏のセカンド幼なじみ。冪と同じく一夏に惚れている。

専用GS「アルトロン」。

シャルル・デュノア

フランス代表候補生。第二の男性GS装着者としてGS学園に転入してきた。そんな彼には秘密が…？

専用GS「ヘビィアームズ改」。

しじいだ かずま
白枝一馬

本作オリジナルキャラ。日本代表候補生。第三のGS装着者としてGS学園に転入。彼がGSを扱えるようになったのにはある人物よってらしい…。

専用GS「ユニコーン」。

たけし けんぞう
更識簪

一馬と同じ日本代表候補生。あまり目立ってはいなかったが一馬によつて…。

専用GS「ストライク」。

DATE FILE (後書き)

新キャラが登場したら随時ここに簡単な紹介文を載せていきます。

EPISODEN (前書)

EPISODEN 2. JUNI

EPISODE 2

ここはGS学園屋上。他の女子生徒を振り切って俺と箒は屋上にたどり着いた。

「久しぶり。六年ぶりだな。」

「ああ…。」

六年ぶりに再会した箒は以前よりも鋭さが増している。でも結構可愛くなったかも…。

「そついえばさ。」

「？」

「剣道全国大会優勝おめでとう。」

「な、何故お前が知っている!？」

箒は相変わらずの口調でそう言った。昔からこいつは男勝りな口調だったな。まあ、そ

れはそれで人の個性だけだな。

「何故って、実際に会場で観戦したからだよ。」

「なら一言くらい声をかけてくれれば良かったのだが…。」

箒は残念そうな口調でそう言った。

「だってさ、千冬姉に言われてたんだよ。試合が終わったら即座に帰れ、って言われてさ。」

ほら、お前も知っているだろ。千冬姉に逆らうと…。」

箒の表情が徐々に凍り付く。

「ああ…。なら仕方ないな。」

二時間目のチャイムが鳴る。

「やばっ！戻るぞ。」

「ああ！」

全力疾走で教室に戻る一夏と箒。

「そついえばさ箒。」

「？」

「可愛くなつたな…。」

「//////////////////////!!!!!!!!!!!!!!」

教室に戻った俺達は千冬姉の出席簿アタックを喰らったのであった。

EPISODE 2 (後書き)

次はあの貴族様がご登場です。

EPISODE 3 (前書き)

EPISODE 3です。この話の中にでてくる表現はrihitoさん作「IS」「インフィニット・ストラトス」 WHITE B L A D E & L I O N S O U L . . .」に登場するキャラ「リオン・マードック」から許可をもらって引用させていただきました。rihitoさんありがとうございます。ではお楽しみください。11/13一夏を怒らせすぎとの指摘がありましたので感情をかなり抑えました。

EPISODE 3

(何なんだよ…、このPSフェイスソフト装甲とかGNジーエヌドライブとか…。)

一夏は困惑していた。教科書に載っている用語が理解できていなかった。

「あの、織斑君？」

「はいっ！！！！」

一夏は思わず大きな声を出してしまった。

「あの…、もしかして、怒ってます？」

怒ってるなんて滅相もない。

「いえ、ちょっと驚いただけです。すいません。」

「そうですね、良かったです。何か解らないところはありますか？あれば言ってください

いね。私は先生ですから！」

この際言ってしまうおう。

「先生！」

「はい、織斑君！！！」

「全部解りません!!!」

ズガシヤアアアア!!!

何人かの女子がずっとこけた。え？俺何か変な事言ったかな？

「織斑。入学前に事前学習書を読んだか？必読だぞ。」

事前学習書？もしかして…。

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました…。」

バシッ!!

千冬お得意の出席簿アタックが一夏の頭を狂い無く襲った。

「後で再発行してやる。一週間で覚える。いいな。」

「はい…。」

千冬姉に睨まれたらどんなに気の強い奴でもたじろぐな…。

そんな一夏の考えが読まれていたのか、再び出席簿が一夏の頭を襲った。

二時間目が終わり、休憩時間に入った。

「ちょっとよろしくて?」

その声をかけてきたのは外国人だった。若干薄い金髪は腰のあたりまで伸びている。

制服はいかにもお嬢様らしいカスタムだった。ちなみにGS学園は制服カスタム自由。

「ん？」

「まあっ！！私が話しかけているというのにそのようなお返事！！」

誰だっけ。俺この子知らない。ともかく伝えよう。言葉だ。

「悪いな、俺は君のこと知らないんだ。」

そう言ったらその女子はさらに驚いた。

「まあ、この私を知らない！？セシリア・オルコット、イギリス代表候補生のこの私を！」

俺はセシリアが言った言葉の中に引つかかる節があった。

「一つ聞いて良いか？」

「いいですよ。下々の声に答えるのも貴族の役目。」

何かいかにも上から目線。あんま好きじゃないんだよな……。

「……………代表候補生って……………何だ……………？」

ドンガラガッシャーン！！！！！！

クラス中の女子がずっとこけた。……俺何か変な事でも言ったか？

「まあ！！日本の方はここまで常識に疎いのでしょうか！」

こら待て。常識も何も俺はGSの事はここに来るまで何も知らなかったんだぞ。

「常識ですわよ、常識！！」

聞くだけ聞いてみるか。

「その代表候補生って？」

セシリアは腕を組んで説明を始めた。

「国家や企業の代表、その候補生、つまりエリートとクラスを同じに語から想像できるでしょう？」

なるほど。そう言うことか。

「そう、エリートなのですわ！私というエリートとクラスを同じにするだけでも奇跡！！幸運なのよ！！」

何か彼女の背景がバラになった気がしたが気のせいだろう。

「その事をもう少し自覚してくださいさる？」

「そうか。そりゃラッキーだな。」

あれ？セシリアが不機嫌そうな表情になった。

「馬鹿していますの…?」

「いや。」

「男性で唯一GSを起動させたと聞いて少しは期待していたのですが…、これでは…。」

俺に何かを期待されても困るんだがな…。

「まあ、どうしてもGSの事が知りたいなら、泣いて頼めば教えてあげない事無いですよ。下々の声に答えるのも貴族の勤め。それにエリートなのですから。唯一入試で教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「入試って、GSを動かすのだよな?」

セシリアは「それ以外に何かあるのです?」と答えてきた。

「俺も倒したぞ、教官。」

まあ、向こうが突っ込んできて回避したら壁に激突してそのまま気絶しちゃったんだだけ

どな。

「倒したのは…私だけと聞きましたが…。」

震える声でそう言うてきた。

「女子だけってオチじゃないのか？」

「あ、あ、あ、貴方も教官を倒したっていうの！！！！！！！！」

何か落ち着きが無い。とりあえず落ち着かせよう。うん、話はそれからだ。

「落ち着けよ、な？」

「こ、これが落ち着いて……。」

3時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「この続きはまた次で！逃げるんじゃないやありませんよ！」

誰が逃げるか。

「ではこれより、再来週行われるクラス代表対抗戦に出場するクラス代表を決める。ここで決定した者は今後生徒会会議への出席……、まあクラス長と考えた方がわかりやすい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

こついうお堅い役目は他の人に任せればいいな。さっきのセシリアって子に任せればいい

いかもな。こついうの引き受けてくれそうだな。

「はい、織斑君を推薦します。」

なるほど、俺か。……。

「つて俺え!?!」

「私も!?!」

「私は…篠ノ之さんかな?」

俺の名前に混じって篝の名前が拳がった。

「え?何でなの?」

「知らないの?篠ノ之。ほら自ずと出てくるでしょ、天才のあの人が。」

その女子はなるほど!と手で相づちを打つ。あの人とは篠ノ之束。篝の姉さんにして、

GSを開発した天才だ。そういえば今はどうしているんだろう。

「他にはおらんか?いないならこの二人で来週の実習時間に決定戦を…。」お待ちください!」「」

千冬がそう問いかける。そこへ割り込んだ一声。その声の主は。

「納得がいきませんわ!こついつ役目は私こそ適任ですのに!！」

セシリアだった。エリートである自分が推薦されなかった事に腹を立てている。

「第一、こんな文化が後進的な島国に来てるだけでも耐え難いのにこの様な屈辱を一年間も味わえと!!」

「島国つて、イギリスも同じだろ。」

「日本と同じにして貰いたくありませんわ!」

「つたく、頭が固い奴だ。もう少し柔軟な思考を持とうぜ。」

「こつちも言わせて貰うけどよ、イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ…。」

「何ですって!!イギリスにだって美味しい料理はありますわよ!」

「まずい、怒らせた。ここは引き下がって事を片付けよう。」

「ごめん、こつちが悪かった。クラス代表は譲るよ!」

それを聞いて少し落ち着きを取り戻したセシリア。

「まあ、たとえ勝負をしても私の勝ちは見えていますわ。唯一男性でGSを起動させた織斑さんならまだしも」

「所詮姉の七光りで入学した篠ノ之さんに私が負けるはず…。」

「おい、それは言い過ぎじゃないのか。」

「はい?」

「まあ、確かに箒の姉さんは東さんだ。だけど、七光りだからと一概には出来ないだろ」

「セシリア・オルコットお前を来週の決定戦で倒して反省させてやる。」

「何を急に…！先程譲るとおっしゃったのは貴方で…！」

「そこまでにしろ。オルコット、お前の先程の発言は良くない。織斑の方が正しい。この決着は来週のGS実習の決定戦で行って貰う。では山田先生、授業を。」

箒は一人考えていた。

（一夏が……。）

EPISODE 3 (後書き)

どうでしたか？戦闘は話の進行具合からしたら「一話くらい先です。」

EPISODE 4 (前書き)

EPISODE 4 前書き

EPISODE 4

ようやく一日目が終わり、俺は帰ろうとした。

『生徒の呼び出しをする。一年生織斑。大至急学生寮事務室まで来るように。』

千冬姉に呼ばれた。学生寮事務室？何故だろう。俺は学生寮に向かった。

「織斑先生、お話って…？」

「お前の生活のことだ。事情があつてな、今日から寮で生活する」とになった。

「え？俺って自宅通学だったんじゃ…。」

「モルモットになりたいのか？」

「いいえ…。」

その一言で俺は沈黙した。まあ、妥当な理由だけど…。

「もう部屋は決まっている。1034号室だ。間違えるなよ。」

「はい。」

1034号室前に着いた。ここが俺の部屋か…。

一夏は扉を開いた。まず目に飛び込んできたのはベッドだ。見ただけでもフカフカ感が

伝わってくる。そこらのホテルよりよっぽど質が良い。流石国立。

「すげえ…。」

「誰かいるのか？」

「!!!!!!」

女子の声。それはシャワールームから聞こえてきた。慌てる一夏。

「ああ、同室になった者が。これから一年間よろしく頼む。」

声が徐々に聞こえやすくなってくる。近づいている証拠だ。

「こんな格好ですまない。シャワーを使っていた。」

(やばい…。あれ？でもこの声どこかで…。)

「私は篠ノ之箒」

シャワールームから出てきたのは6年ぶりに再会した幼なじみだった。その姿はタオル

一枚という異性に見られたらとてもじゃ済まないくらい恥ずかしい姿だった。

「ほ、箒…。／／／／／／／／」

「い、一夏…。／／／／／／／／／／」

綺麗できめ細かな肌をまだ乾ききつてない水滴が滴る。それは一夏からはとても妖艶に

見えた。

「み、見るなあ…！！！！！！！！」

「う、ごめん…！！」

慌てて背を向ける一夏。その顔は真っ赤だ。

「な、何故お前がここに…？」

「な、何故って、俺の部屋だから…。それよりも着替えてくれ…。目のやり場に困る…。」

「わ、解った。」

慌てて箒は着替えを始めた。

「にしても、まさかお前と同室になるとはな…。」

「ああ、俺も驚いたぜ。」

二人はベッドに腰掛けて話していた。箒は制服ではなく道着に着替えていた。箒だから

なのか、とても似合う。

「お、お、お…。」

篤がもじもじしている。どうしたんだろっ？

「お前から希望したのか、私の部屋にしろと…／＼。」

「そうできたならそう言ってたさ。」

「？」

篤はきょとんとしていた。そうできたなら、そうしていたって…、もう私と同室って

決まっているではないか…。

「ほら、俺の入学って、かなり特殊じゃん。だからさ、千冬姉が緊急で用意したらしいんだ。」

「そうか…。」

「でも、俺は篤と同じ部屋になれて嬉しいぜ。」

その言葉を聞いた篤は表情が明るくなった。

「そうか、それは何よりだ！ではこれから一年間よろしく頼む！」

「…。」

俺と筈は握手を交わした。

翌日、朝のSHRにて…。

「織斑、GSの事だが…、訓練機が用意できない。学園の方で専用機を用意することになった。」

その言葉にクラス中がざわついた。

「この時期に専用機…？」

「それって政府からの支援が出るって事よね…？」

「いいなあ、私も専用機欲しいなあ…。」

専用機ってそんなに凄いのか…。

「届き次第受け渡し及び適合化フッティングを行う。忘れるなよ。」

そして受渡日…。まさか決定戦当日とは…。

「織斑。これが、お前の専用機GN-001、エクシアだ。」

目の前には待機展開された専用機、「エクシア」が時を待っていた。この時を。

「背中を預けるように、そつだ。」

一夏の体にエクシアの装甲が装着されていく。一夏からしたらその感覚は一体化、と

言える。

「よし、発進時間だ。準備は良いな。」

「はい。」

千冬の言葉に一夏はきちんと返事をする。

「一夏。」

篤が声をかけてきた。

「勝てよ、必ず、信じている。」

その言葉に勇気づけられた俺は指で「ありがとう」のサインを送る。

「発進タイミングを織斑君に譲渡します。」

山田先生がそう言ってきた。

「織斑一夏、エクシア発進します!!」

カタパルトから発進したエクシア。その背中からは設置されているGNドライブで発生

したGN粒子が美しくに尾を引いていた。

アリーナバトルフィールドにはすでにセシリアが専用機「ケルデ

イム」を装着して待機

していた。

「逃げなかったのですわね。」

「そっちこそ。」

「先日は申し訳ありませんでした…。素直に失言を認めますわ。」

その言葉は一夏にとって意外だった。まさか謝ってくるなんて。

「解ってくればいいさ。でも。」

「それと勝負は別ですわ！」

ケルデイムの主力武器「GNスナイパーライフルIE」がエクシアの胸部を直撃した。

「ぐああっ！」

それを受けて吹っ飛ぶが体勢を立て直し、右腕のGNソードのライフルモードでケルデ

イムを撃つ。しかし、簡単に避けられる。

「さあ、ワルツの始まりですわ！！！」

ケルデイムの背部から何かが発射された。それはそれぞれ自動で動き、エクシアに向か

ってビームを発射する。

「これがこのケルデイル最大の特徴、GNシールドビットによる全方向攻撃です」

わ！」

くそっ！厄介だ、こいつは格闘型！接近できなければ意味が無い！ん？何故だ。あいつ、

ライフルを発射してこない。もしかして…。試してみるか。

「はっ！」

エクシアは下半身背部に取り付けられたGNダガーを抜き取り、それをビットに投げつ

けた。それは見事に命中し、爆発した。

「何ですって！？当てた…。」

「ようやく解ったぜ。ビットは自己行動ではなく、お前が指示を出している。そして俺の反応が一番遅い角度から攻撃してくる。俺はさっき意識して反応の遅い角度を作った。そこへ攻撃をすれば破壊できる。」

セシリアにとって凶星だった。まさか読まれてるなんて。

あっけなく射出されたビットは破壊された。しかし…。

「ビットは11機ありましてよ!」

そう、搭載されているビットは11機。射出していたのは9機。
一夏は不意を突かれ、

ビームを受けてしまった。

「一夏!」

煙が発生し、安全が確認できない。司令室で千冬が呟く。

「機体の能力に救われたな、馬鹿者。」

煙が晴れたそこには赤く輝くエクシアがいた。

トランザムシステム発動

そうエクシアのモニターに表示された。トランザムシステム。一部のGNドライブだけ

に搭載されているシステム。高濃度圧縮GN粒子を全面開放し、機体のスペックを3倍

相当まで上昇することが可能。以上教科書から引用。

「はあっ!」

残りのビットを破壊し、GNビームサーベルを抜き、一気にケルデイルに接近する。

「くっ……………！」

ビームの刃がケルディムを斬りつける直前、ビームの刃が展開を停止した。

機体の赤い輝きも沈黙し、動きが止まった。

シールドエネルギーゼロ。戦闘続行不可能

『勝者、セシリア・オルコット。』

「……………」

負けた。俺は。

「全く、よくここまで持ち上げてくれたな馬鹿者。」

全く嬉しくない褒め言葉を千冬姉がくれた。

「にしても、何で負けたんだ？」

「トランザムシステムは、高濃度圧縮GN粒子と並行してシールドエネルギーも消費する。それでシールドエネルギーが空になった。」

「なるほど……。」

「まあ、今回は自動発動だったが訓練すれば自在に発動できるようになる。お前ならな。」

「お前なら？なぜそう言い切れるんだ？」

千冬はフツ、と微笑み口を開いた。

「私の弟だからな。」

その言葉は下校している今も耳に残った。

「一夏、惜しかったな。」

「ああ、すまないな、お前に特訓してもらったのに……。」

「いや、相手は代表候補生、あそこまで戦えたでか良い方だ。」

「箒！」

「な、何だ？」

箒は突然大きめの声で名前を呼ばれて少し驚いた。

「これからも特訓に付き合ってくれ。」

「そうか、そうか。仕方ないな、よし、これからは共に特訓をしよう！」「！」

「ありがたい！」

シャアアアアアアア……。

シャワールームにはシャワーが流れる音が響く。そこには先程――

夏と戦ったセシリア・

オルコットが立っていた。

無駄の無く引き締まった体型。胸はそこまで大きくないがその大きさが体の見た目のバ

ランスを整えているので本人としては複雑な心境だ。

(織斑……………一夏……………)

(あの瞳は……………)

彼女の母親は今の女尊男卑の社会になる前からいくつもの企業を経営する人だった。

母は自分に対して厳しかった。それでも母を尊敬し続けた。いつか自分もあのような女性

になりたいと。

一方父親は名家に婿入りしたせいか、いつもオドオドして母の機嫌を伺っていた。その

時からセシリアは決めていた。将来あのようなひ弱な男とは結婚しない。

GSが発表されてから父の態度はますますひどくなった。

そして、両親は事故死した。一説は謀殺説がささやかれたが、事

故現場がそれを否定し

た。ホテルが崩れ、200人近い死者が出た。あの日、二人は何故一緒にいたのか。

それからオルコット家の莫大な遺産を狙う輩が現れ始めた。遺産を守るべく、必死で勉

強した。

そしてGS適正が高い事が発覚。国からは遺産を守るための様々な好条件が出された。

そして、稼働データの為に日本のGS学園にやって来た。

そして出会ってしまった。自分の理想の瞳を持った男と。迷いもなく、曇りもない。

実直な瞳を持った男と。

(織斑…一夏…)

その名前を浮かべるだけで胸が熱くなる。

「もっと知りたい、彼のことを。もっと近づきたい、彼に。」

その声はシャワーの音で消えていった。

EPISODE 4 (後書き)

ガンダムの戦闘シーンって難しいですね。さて次回は幼女…じゃなかった、中華少女が登場します。お楽しみに。今回からアニメっぽい次回予告を入れます。

【次回予告】

「ねえねえ誰あの子？」

「代表候補生にして織斑君の幼なじみ！？」

「彼を取り巻く女性って多いね…。」

「次回もお楽しみに！！！」

EPISODE 5 (前書き)

EPISODE 5です。ついにあの子が登場します。主はファー
ス党なのであつかいはあまり…。他の党の方すいません。一筋なの
で。

EPISODE 5

「ここがGS学園…。」

その少女は夕暮れの中、ツインテールをなびかせていた。

「それでは一組クラス代表は織斑一夏君に決定です。」

織斑一夏「って奴がもう一人このクラスに在籍してるのか。うんうん…って、そんな訳あるか!!!」

「あれ、でも俺負けたし…。」

「それは、私が辞退したからですわ。」

そう言いながらセシリアが立ち上がった。

「貴族といえど失言は御法度^{ごほうど}。責任は取りますわ。それで、今回は一夏さんに代表の座をお譲りして責任を取りましたの。エレガントでパーフェクトなこの私が指導すれば一夏さんの実力は…。」

「ちょっと待て。」

セシリアに割って入ったのは筈だった。

「一夏の特訓は私が見ることになっている。本人から直接頼まれたからな。」

「あら、GSランクがCの篠ノ之さん。貴方の実力では一夏さんの成長は…。」

「お前のような撃ってばかりのいやらしい戦い方こそ意味がない。

一夏のエクシアは近接格闘型だぞ。」

二人が言い争っている。そこへ…。

「そこまでにしる。貴様等のランクなど産まれたばかりのヒヨコも同然。織斑はもう教えて貰う相手が決まっている。割り込みはよせ。」

千冬がさらに割って入った。千冬姉の言った事って妙に効果があるんだよな。セシリアも鎮火して

るし。

一時間目が終わり、休憩時間になった。

「知ってる織斑君？二組のクラス代表が交代になったんだって。」

「え？本当に？」

どうやら二組のクラス代表が交代したらしい。

「あれれ、おりむゝ興味あるの？しのっち一筋なのにな？」

そんなのんきな口調で話しかけてきたのはのほほんこと布ほんねのほんほんねこと布ほんね。
本音。だぼだ

ば系の服を着用している癒し系。

「な！何故そうなる！！！」

「え〜だつてさ、しのつちの為にあそこまで怒るんだよ〜。そう考
えちゃうよ〜。ふあ〜

眠い…。ぐう…。」

寝ちゃってるよ。立ったまま。本音の発言に俺と篤は顔を赤らめ
る。ちなみにおりむ〜

とは俺、しのつちとは篤の事だ。

「話しを元に戻すけど、強いのかな？」

「専用機を持つてるのは一組と四組だけだから楽勝だよ！」

「その情報古いよ。」

教室に響く声。その声が聞こえた方向を向くとそこには一人の女
子が立っていた。

「お前、…鈴か？」

「そうよ！中国代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音！今日は宣戦布告に来たって訳
！」

鳳鈴音と名乗った少女。小柄な体躯で茶髪をサイドアップテールで纏めている。

「あれが二組クラス代表…。」

「中国代表候補生…。」

(なんなのだ…。一夏と親しそうに…。)

箒は一人そう考えていた。手に握ったシャーペンはいつの間にか粉々に砕け散っていた。

「鈴！何格好つけてんだ？全然似合わないぞ！」

その言葉に鈴の顔が赤くなる。

「な、何て事いうのよあんたはぁ！！」

お、俺の知ってる喋り方に戻った。それでこそ鈴だ。

「どけ。邪魔だ。」

「だ、誰…。」

鈴の表情が凍り付いた。この反応って事は我らがクラス担任の千冬姉が降臨なされた。

「ち、千冬さん…。」

「学校では織斑先生だ。代表候補生になって礼儀を忘れたか。さっ

さとクラスに戻れ。」

「はい…。」

鈴はとぼとぼ歩いて教室を出ていった。

放課後、俺と箒は第一アリーナに向かった。

「ったく、一夏、遅いわよ。女の子を待たせるのが男にとってどれだけ重たい罪か…。」

鈴が立っていた。やばい、鈴が怒りの兆しを見せている。穩便に事を…。

「おいおい、待てよ。待つてくれって俺か鈴が言ったんならまだしも…。」

「ま、いいけど。」

ホッ、助かった。何だろう、後ろから毘沙門天の気配を感じる。え？何で毘沙門天か

解るかって？そりゃ、振り向いたらそこには竹刀を構えて怒りが露わになった箒さんが立

つておられるからじゃないですか。

「一夏…私がいるというのに他の女と約束か…。楽しそうだな…。覚悟おおおお！…！」

「お、お、」

鈴が何か呟き始めた。お？お腹すいたのか？それともお腹痛いのか？うーむ…。

「幼なじみなら良いのねっ！-！」

EPISODE 5 (後書き)

疲れました。連日投稿はきついです。励ましの言葉が何よりの栄養剤です

【次回予告】

「部屋変わって…。」

「行動力あるよね…。」

「次回では織斑君の過去が…！」

「え？もしかして織斑君の知られざる秘密が明らかになるとか!?!？」

「次回もお楽しみに…！」

EPISODE 6 (前書き)

こちらが本当のEPISODE6です。すいませんでした。

EPISODE 6

「お願い、部屋変わって」

「馬鹿な事を言つな!」

鈴が部屋にやって来た。その理由は部屋を変われ、だ。いきなりすぎる。

「いやぁー篠ノ之さんも男と一緒にじゃ気まずいでしょ。あたしが変わってあげる。」

「別に私は気まずくなど…(あつてると言えばあつてるんだが…)(
箒は俺に抗議の眼差しを送ってきた。俺に振るなよ…。」

「さ、一夏。手続きに行くわよ。」

「あ、おい!」

鈴が俺の手を引っ張り、寮の事務室へ向かおうとした。

「!」

「馬鹿!! 箒!」

箒は置いてあった竹刀を鈴に振り下ろそうとした。しかし…。

「!」

「部分…展開…」

鈴は中国代表候補生。つまり専用機持ち。部分展開はお手の物だ。

「今の、生身の人間なら本気であぶないわよ！」

「あ…。」

箒は持っていた竹刀を落とした。床に当たる音が響く。

「反省しなさい！！！」

鈴は部分展開した右腕に持ったビーム格闘武器を箒に向かって振り下ろした。

「まずい！！！」

ザシュッ！！

「一夏…?」

一夏が間一髪、エクシアを部分展開して防いでいた。ビーム格闘武器はエクシアの

装甲には当たらず、一夏の腕を切っていた。一夏の腕からは大量とまでは行かないがそれなり

の量が出血していた。

「あ……………血……………」

「うわあああああああ！！！！！」

一夏が血を見て叫び始めた。

「とりあえず先生に事情を説明してくるわ。」

二人で一夏の応急処置をした後に鈴はそう言い残して部屋を後にした。

しばらくして千冬が部屋にやって来て一夏は寮の医務室へ運ばれた。箒は千冬から部屋

で聞いた。一夏が何故あそこまで血に怯えたのかを…。

四年前、箒が転校してから三ヶ月が経過した頃。一夏は鈴といつも通り下校していた。

「ふうん、一夏って剣道やってたんだ。いままで知らなかったわ。」

「ああ、千冬姉がやってみろっていわれてさ。それからなんだ。」

そんな何気ない会話が続いていた。

ドンッ！

「痛たっ！！」

鈴が誰かとぶつかってしまった。普通の人にぶつかったなら話を
してあやまれば済ん

だ。しかし…。

「おい痛いなあ。骨が折れてしまったぜ。治療費、払って貰おうか。」

いるいるこついう奴。ほんといつの世の中にも最低な奴はいるんだな。

「払える訳ないでしょう馬鹿!!！」

鈴は気が強く、こんな感じの相手にも反論する性格だった。

「払えないなら、体で払って貰おうかあ!!！」

ぶつかった男は鈴の頬を平手打ちにした。それで気絶する鈴。

「鈴!!！」

一夏は無我夢中で男に立ち向かった。男はポケットに入れていたナイフを振った。

ザシユツ!!!

ナイフは一夏の腕を切った。傷口からは大量の血が溢れ出た。

「うぐっ!!!!うわあああああああ!!！」

痛みで思い切り叫ぶ一夏。その声を聞いて近くの交番の警察官が駆けつけた。

「君！！大丈夫か？名前は？」

「お……織斑、一夏……。連絡先は……バッグの中の手帳に……。」

一夏は気絶した。駆けつけた警官は一夏と鈴を交番まで運んだ。

それから一時間後、一夏は目を覚ました。病院のベッドに一夏は寝ていた。

「気がついたか。」

横には千冬姉が座っていた。

「千冬姉……、鈴は？」

「鈴音は無事だ。怪我もなく今は自宅だ。」

「よかった……。」

一夏は安心したのか、再び眠り始めた。

「織斑一夏君の、保護者の方ですか？」

後ろから一夏の治療を行った医師がやって来た。

「はい、姉です。」

「なら都合がいい。実は…」

「本当ですか!?!」

「はい。一夏君は恐らく今は多量の血を見るとひどく怯えてしまい、精神不安定になって

しまいます。恐らく切られた時の血を見て…。」

「そうでしたか…。」

千冬は決めた。今後一夏には血を一切見せない。

「　　という訳だ。その時鈴音は気絶していたから何も知らない。そこは理解してくれ。」

千冬の話聞いた筈は驚きを隠せなかった。まさか自分が転校した後にそんな事があつ

たなんて。

「篠ノ之。あいつを頼む。私以外であいつを一番理解しているのはお前だけだ。」

「わかりました。任せてください。」

千冬は安心した。一夏を理解してくれる人がいてくれて。

部屋で筈は緑茶を一人飲んでいた。

「ただいま箒。」

一夏が帰って来た。腕には包帯を巻いている。

「怪我の方は大丈夫か？」

「ああ、細胞再生活性化治療、とかいうやつを受けたから安心だ。対抗戦には差し支えない。」

それを聞いて箒は安心した。

「その、千冬さんから聞いた。お前は昔……。」

「聞いたのか……。くっ……！」

一夏が少し怯えた。思い出したのか、体が若干震えている。

「一夏……。」

「箒／＼！？」

箒は一夏をそつと抱き寄せた。いくら唐変木の一夏と言えど女子に抱き寄せられたら赤

くなる。

「お前は、もう怖がらなくてもいい。怖ければ私が側にいてやる。だから安心しろ。」

「箒……、うつ……。」

一夏の目が光った。

「泣いているのか……？」

「な訳ないだろ……。男が女の前で泣いてたまるかよ……。」

「泣いても良いぞ。」

「へ？」

その時の箒の表情はとても慈悲に溢れていた。

「男でも、泣いてしまうことはある。今回はたまたまそれが私の前だった。それだけではないか。」

「あ……、俺……。」

「私の元で良ければ、泣いても良いぞ。」

一夏は箒の優しさを体中で感じ、自分の我慢していた事を全て吐き出す様に泣き出した。

EPISODE 6 (後書き)

一夏が怯える表現は沙月さん作 I S i f) 鈴 i n)
より許可を頂いて拝借いたしました。沙月さん、ありがとうございます。

【次回予告】

「鳳さんの専用機、格好いい〜!!」

「織斑君勝てるかな…?」

「大丈夫!! きっと勝てるよ!!」

「けどその勝負に乱入する輩が!!」

「次回もお楽しみに!!」

EPISODE 7 (前書き)

対抗戦始まります。

EPISODE 7

GS学園第一アリーナ。ここで本日、一年生によるクラス代表対抗戦が行われる。

「一夏さん、私が教えた無反動回転アブソリュートターン、活用してくださいね。格闘戦仕様とはいえ、射撃武器もあるのですし…。」

そう言ったのはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生。
「私の教えた剣での立ち回りも忘れるなよ。」

そう言ったのは篠ノ之箒。俺の小学校時代の幼なじみ。こいつに對して最近何か言い表せない何かが…。

「織斑君、発信準備、良いですか？」

「あ、はい。いつでも良いですよ。」

そう言ったのは山田真耶。俺の副担任の先生。ちなみに担任は…。
「織斑、お前に発進タイミングを譲渡する。いつでも良いぞ。」

千冬姉こと織斑千冬。絵に描いたような…ここまでにしておこう。
「織斑一夏、エクシア、発進する!!！」

カタパルトからエクシアはGN粒子を靡かせながら発進していった。

観客席から発進する一人の少年。見た目は日系であり、恐らく日本人だろう。

「あいつが一人目の男性装着者、織斑一夏…。」

その少年の左腕には白い時計が付けられていた。

「逃げなかったのね。」

そう言ったのは鳳鈴音。中国代表候補生にして一夏の主に中学校時代の幼なじみ。

「あたりまえだ。」

「あのさ、こないだのあれ、ごめんね。昔の嫌な記憶、思い出させちゃって…」

こないだのあれとは、寮での出来事。あれはきつかったが…算が
いてくれたから落ち着けた。無論、鈴も先生に報告してくれたから
あいつにもその点は感謝。

「いいぜ、別に気にしてないし」

「うん、本当にごめんね。でも…」

「それと勝負は別よ！」

試合開始のアラームと共に鈴は専用機である「アルトロン」のツ
インビームトライデントを用いてこちらへ攻撃を仕掛けてきた。そ
れを一夏はGNソードで受け止める。

「くっ…押されてる…!!」

「まだまだあ！」

ズドン!!

格闘武器同士でのつばりあいなのに脇腹に何かが直撃、エクシア
は吹き飛ばされて地上へと落下した。

「くそ…、やられた…」

一夏は痛む体を必死に起こした。

(こうなったら…TRANS-AMで終わらせる!!)

「TRANS-AM！」

エクシアの全身が紅く輝きだした。TRANS-AM SYSTEM
EMが発動したからだ。猛スピードで鈴へ迫るエクシア。

「!?嘘…速い!!」

GNソードがアルトロンを一太刀にしようとしたその時
。 。
シュンッ!!

目の前をビームが通過した。ビームが飛来した方向を見ると
。

「何よあれ…」

一機のGSがいた。

「まずいわ、乱入者よ!!」

「先生!!」

「山田先生、アリーナ全体にLv4警報を!!」
「了解しました!」

『Lv4警報発令! Lv4警報発令! 生徒は教員の指示に従って速やかに避難せよ! 繰り返す...』

「織斑先生、乱入GSのデータです!」

千冬はモニターのデータを見つめる。

「製造元不明、無人GS……」

「ハルファス……」

アリーナではエクシアとアルトロンが協力してハルファスを迎撃していた。

「畜生、こいつ、強い!!」

フェザーファンネルが二人を苦しめていた。

「ああもう、鬱陶しいっいたらありやしないわ!!」

代表候補生でも手こずるハルファス。黒い不死鳥の姿を持つGS。

「俺のエクシアのワールドエネルギーも残りがわずかだ……」

「弱気になるんじゃないわよ!! 何か、解決方法があるはずよ!!」

「いや、代表候補生であるお前だからこそ、打つ手がないことが解ってるんじゃないのか?」

鈴は考えを読まれて面食らっていた。　　そうよ、確かに一夏の言う通りじゃない。でも……。

「篠ノ之さん? どこへ行ったのでしょうか……?」

セシリアは先ほどまで側にいた筈を探していた。彼女の脳裏に何が浮かんできた。

(篠ノ之さん、まさか……!!……)

その場への待機命令を千冬から言い渡されたセシリアはただ無事

を祈るほかなかった。

「一夏あ!!!!!!!!!!」

アリーナにその声は轟いた。箒が拡声器を最大出力にして叫んでいた。

「箒!？」

「男なら、男なら、そのくらいの敵など倒してみせろ!!!!」

その声を聞いてハルファスはフェザーファンネルを箒を攻撃するように指示を出した。ビームが箒に迫る。

「まずい、箒、逃げろ!!」

「っ!!!!!!!!!!」

間に合わない!!くそっ、エクシア、少しだけで良い!!TRANS - AMを起動させてれ!!!!!!!!!!

その願いが通じたのか、エクシアは再度TRANS - AMを起動させた。

「はああっ!!」

GNダガー、GNライフルでフェザーファンネルを全て撃ち落とし、箒の安全を確保した。

「貴様、箒を…」

「箒を攻撃したなあああ!!!!」

その時、一夏の瞳が変わった。中心に好転、周りは全て彼の元々の瞳の色だ。

「箒を攻撃した罪は…罪は重いぞおお!!」

GNビームサーベルでハルファスの両腕を切り落とした。TRANS - AMはGNドライブによって性質が違う。少なくとも言えることはエクシアのTRANS - AMは。

絶対防御、それら全てを通過して本体に直接ダメージを与える。それにより、ハルファスの両腕は切り落とされた。

「うおおおおおおお！！」

GNソードでハルフアスを真っ二つに切り落とし、戦いは終了した。

「はぁ…疲れた…」

そう呟きながら一夏は寮の自室の扉を開けた。

「ん…？何か、良いにおいがする…おおっ！！！」

「遅いぞ一夏。その…すまなかつたな…。アリーナでは…」

良いにおいの正体、それは箒が作った焼魚だった。ちなみに焼いた魚は秋刀魚^{さつまい}。旬ではないが美味しそうな仕上がりがりだ。

「アリーナの事は別に良いよ。これ、俺の為に作ってくれたのか？」

「ああ、その、なんだ、たまにはこういう食事を二人で摂りたくてな…。」

そういえば俺のとは別にもう一人前同じ物が用意されている。なるほど。

「それじゃ、いただきます」

一夏は早速秋刀魚に手を付けた。

「おおっ、美味い！！この味付け俺の好みなんだよなあ！」

「む、昔私の家で母さんが作った物をよく食べていただろ。その味を再現してみた。き、気に入ってくれたなら嬉しい」

久々に見たな、箒の笑顔。

その語も俺達は食事は昔の話しをネタにして楽しい食事となった。

翌日。教室が騒がしい。何故？そりゃ…。

「今日は、転入生を紹介します。まずはフランスからやってきたシヤルル・デュノア君です」

新しい嵐は目前に迫っていた。

場所は変わって一年四組。こちらでも同じような事態が…。

「えー、転入生の白枝一馬君^{しろえだかずま}だ。彼は日本代表候補生、教わることも多いだろう」

「白枝一馬です。これからよろしくお願いします」

このクラスは一組の様な拍手喝采は起こらなかった。一馬を見つめる少女がいた。

(……………)

その少女の名前は更識簪さらしきかんざし。一馬と同じ日本代表候補生。

GS学園にやって来た二人の男子。それは何を意味するのか。

EPISODE 7 (後書き)

オリキャラ「白枝一馬」を登場させました。専用機は…生からして、解りますよね…？

【次回予告】

「男の装着者が二人も!？」

「何か凄い事が起こりそうだね…」

「白枝君のGS純白だね」

「次回もお楽しみに！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3435y/>

GS～ガンダムシステム

2011年12月7日11時54分発行